

3 世界の蝶、蝶の世界

人はそれぞれ多かれ少なかれ趣味を持っている。新聞のコラム等の人物紹介欄をみて、各人各様に何と多様な趣味があることかと驚かされる。夢(たで)食う虫も好き好きとはよく言ったものだ。だが、そうした一見何の得にもならない特定の趣味の世界になぜ足を踏み入れることとなったのかについては、かなり偶然でしかなかったとか、理由は必ずしも定かではないとかいう場合も少なくないのではなからうか。また、趣味には長続きする場合とそうでない場合が生じてくるようだが、それは一体なぜだろうか。例えば、切手の収集はおそらく誰もが一度は手掛けるものであるが、それにもかかわらず趣味といえるだけの研究を長く継続しているケースは比較的稀になってくるのは一体どうしてなのか。趣味についてその契機や持続性に関する一般論を展開しようとしても、

それは、不可能とはいえないにしても、まず無益というべきであろう。そもそも、他人の趣味の話聞かされるのはおよそ退屈このうえないことであり、また人の趣味を他人に語るのはいそそ余り良い趣味とはいえない。趣味の意味は人それぞれが持つものであり、一般化できないものである点にこそ趣味の本質が潜んでいるのかも知れない。

私の場合、蝶(むしる蝶々という方が動的でありより望ましいと思うが)について、かれこれ三〇年余りも不思議なかかわり合いが続いている。これがいかに始まったのかは、今では全く記憶にない。小学生時代、夏休みに誰もがかつてやっただようないわゆる昆虫採集の宿題として蝶を集めた記憶はあるが、特に夏休みになると蝶に熱中するようになったのは中学生になってからである。近所で採集できる蝶を次々と採集し、標本箱の中にその種類数が増えていくのが当時の大きな楽しみであった。また日本の他の地方に生息する蝶を収集することに対する憧れもなかなか押え難いものがあったが、実際にそうした採集旅行に出かけることは貧乏中学生には出来るものではなかった。このため、たまたま当時出版されたばかりの目をみはるような美しい図鑑を購入、毎日飽かずにそ

の写真をながめるとともに、そうした蝶たちの生態に関する解説を繰返し読むことよって日本各地に生息する蝶に思いをはせたものである。その本は「原色日本蝶類図鑑」(横山光夫著)という当時としては画期的な大冊の図鑑であった。定価は、当時の一中学生としては数か月分の小使い充当を必要とした八五〇円という高価なものであったことも忘れられないが、それにも増して、この本がひとりのアマチュアによって書かれたものであることが自分にとっては大きな驚きであった。この本は、それ以降、自分の手垢が滲みついた貴重品となっており、学生時代および入行後の合計三度にわたる外国生活の時期を含め終始伴侶として各地を旅してきたあと、現在も書斎の片隅に収まっている。入行後も地方勤務の間はしばらくは採集を引続き楽しんだものだが、その後は蝶の標本を作ったり見たりすることよりも、野山に出かけていき、専ら自然界で生存するままの蝶を直接見るのを楽しむという風に次第に楽しみ方が変わってきている。これは、ひとつには自然保護運動が浸透していくなかで、捕虫網を振りながら採集に出かけることが次第に後ろめたいものになったという面があるが、やはり美しい生物の殺生には次第に耐え難く感じるようになったことが大きいと思う。それにしても、蝶が私に対して持つ魅力は全く変わっていないのがむしろ不思議である。

それはまず第一には、何といっても蝶の色彩、紋様の美しさとその多様さが他に例をみないものであることだろう。昆虫全体の中でも蝶の華麗さは随一だ。世界には五千種以上の蝶が知られているが、その中には、強い太陽の光の下でぎらぎらと青い美麗な翅を輝やかせながら飛ぶ一族(南米産モルフオ蝶類)がいる一方、専ら日陰を住み処とし、その翅の色も地味で不活発ないわばネクラ型の一族(ジャノメチョウ類)もいる。また蝶は、その翅の紋様自体が大自然の芸術作品であるだけでなく、そのサイズも豆粒大の小型種から鳥ほどの大きさがある巨大種まで変化に富んでいる。とくに、世界最大の蝶であり、また緑と金色に輝く翅を持つことから美麗種としても知られるトリバネアゲハという蝶については、その発見者がこれをニューギニア島で鳥と間違えて鉄砲で打落としたと伝えられており、このためその蝶がトリバネ(鳥が羽根を開けたほどに大きい、英語でもバードウイング)アゲハと命名された経緯がある。

日本国内産の蝶に限っても、それは多様性に富んでいる。現在わが国では約二九〇種

の採集記録があるが、このうち台風や船に乗って来日した外来種ないし偶産種約三〇種を除いても約二六〇種が土着している。この数は、東洋の蝶の宝庫といわれる台湾（三五〇種）よりは少ないにしても、同じ島国であるイギリス（六五種）よりははるかに多く、また全ヨーロッパ（約三八〇種）に比べても面積の割にはわが国は恵まれている。かつて二年間イギリスに滞在した際、そこでみかける蝶が比較的地味かつ小型であり、またその紋様のバラエティーに乏しいことをみるにつけ、故国の状況のありがたさを痛感することがしばしばであった。日本の土着種をみると、大型で美しい斑紋を持つ一族（アゲハチョウ科）、中型の敏捷な一群（タテハチョウ科）、色彩がことに多様で紋様に味深いものが多い小型種（シジミチョウ科）など各種類がバランスよく生息しているのも特徴的である。とくにわが国では、南北に長いという地形を反映して南方系および北方系の双方の種類が共存しているうえ、山岳、渓谷、裾野、平野などきめ細かな地形とそれに伴う植生を持つことによって「蝶相」が豊かなものとなっているわけである。このため、わが国の多様な蝶に対しこれまでいわば各種のコンテストの機会が愛好家によって与えられてきている。最もよく知られているのは、輝く紫の美しさと巨大さを誇

るわが国の名蝶であるオムラサキの「国蝶」制定（昭和三十一年に日本昆虫学会が決定、七十五円切手の図柄にも採用）であるが、その他にも、わが国における三大巨蝶（オムラサキ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハ）の指定があったり、また、小型ながら特に美しく、黄昏どきに花吹雪のように飛ぶものが多い二〇種余りのシジミチョウをゼフィルス族（ギリシャ神話におけるそよ風の意味）と称して生物学上の分類とは別に特別扱いするといった具合である。

蝶の第二の魅力は、標本となって箱に収まってしまった蝶や幼虫を飼育して蝶を羽化させる場合を除けば、ほとんどの蝶は、通常考えられている以上に特定の地域に、しかも特定の時期に限ってみられる点に関連している。夏になれば概して多くの種類がみられるのは事実であるが、自然界は予想以上にきめ細かく回転している。早春の頃にだけしかみられない蝶（ミヤマセセリ、ツマキチョウ、ギフチョウなど）もいれば、夏の高原の朝夕にしかみられない一群（ゼフィルス類）もいる。また、寒中には成虫のまま冬眠して春を待つ蝶（アカタテハなど）がいるだけではなく、盛夏の暑さを避けるべく「夏

眠」したあと秋になって再び姿を現わすといった合理的な行動をする一群（ヒョウモンチョウ類）もいる。さらに、春先に羽化したものと夏に成虫となるものでは体型、紋様等に大きな差が生じる場合も少なくない。例えば、普通種であるアゲハチョウでも、その春型は比較的小型でやさしい黄色の装いをしていいるのに対し、夏型は大型でありかなり黒っぽくなるので一見別種かと思わせるほどの差異がある。このように、蝶を見ることはまさにそこから季節を読みとることであるともいえる。

また地域的な分布をみても、モンシロチョウのような普通種を除けば、南方系の蝶は当然のことながら暖地に、北方系の蝶は寒冷地や高地に、そして高山蝶は特定の標高に生息している。日本に土着する二百余种については、現在では全種についてその戸籍原簿とでもいえる国内の生息地域を示す詳細図が関係者の努力によって完備するに至っている。地域が異なればそこに分布する蝶の種類が異なるというだけでなく、同一種であっても生息地特有の斑紋を示す種類（いわゆる地方型の発達）も少なくない。例えば、敏捷に飛ぶ蝶の一種であるタイミョウセセリには、おそらくことに日本語における発音の基本分類と同様に関東型と関西型という二つのタイプがみられており、その生

息分離帯が正確にはどこにあるのか、またなぜそうなっているのか、など興味深い研究課題を提供している。特に、生息地がとりわけ局地的である場合には、他の動植物の命名と同様、蝶名自体にそうした地名（最初に発見された地名の場合が多い）が冠されることになる。例えば、南方系のナガサキアゲハやサツマシジミ、北海道にのみ分布するエゾシロチョウなどのほか、主として深山に生息するミヤマカラスアゲハもこうした種類に入る。ことに、鳥取県久松山で発見されたヒサマツミドリシジミ、屋久島にしか生息しない華麗な珍蝶ヤクシマミドリシジミ、大雪山の高地に特産のダイセツタカネヒカゲなどは生息地が極めて限られる珍種として知られている。このように、特定の地域において蝶を目にすること（実は見ようと思っただけであっても期待どおりにはなかなか見られない場合が少なくないのだが）は、自分が実際にその地方にいたことを実感させるものでもある。自然界においてはばたく蝶を観察することは、やや誇張していえば、自分の存在を季節的かつ地域的に実感させてくれるという意味を持っている。

蝶を愛でる第三の魅力は、蝶に関する研究は、生物学を職業とする学者によるよりも

むしろアマチュアによる研究の方がより幅広くかつ熱心に行われていることと関係している。蝶に関する研究論文や書物を読む場合には、大ていの場合、例えば経済理論の本を読む場合にはないアマチュアらしい情熱とある種のすがすがしさが伝わってくる場合が多い。わが国の蝶を網羅した図鑑類は数多く、それらは美術的な美しさだけでなく内容面における学問的貢献度も世界的に高く評価されているものが少なくないが、実はその大半は医師のほか、会社役員、公務員、教職員といったサラリーマンを中心とするアマチュアの手によってこれまでに刊行されたものである。こうしたアマチュアの貢献度の大きさは国際的にみても類似した傾向がみられており、例えば、手元にある英国の蝶図鑑でも同様のものが少なくない。また、世界の昆虫学の総本山といわれる大英博物館の研究資料となつている膨大な標本も、その大部分は各地に派遣された軍人、宣教師、外交官などのアマチュアの人たちによって集められ寄贈されたものであるようだ。

確かに、昭和三〇年代までの国内での蝶研究の主体は新種の発見や既知種についての新産地探索ないし生活史説明が中心であり、こうした面ではアマチュア愛好者が専門学者よりも人数面をはじめ比較優位にあつたとしても特に驚くまでもないかも知れない。

しかし、日本の蝶に関するこうした分野の研究はこれまでではほぼ一巡したことから最近では研究分野が多様化しており、例えば、地域蝶の成立ないし種の間関係の遺伝学的に解明するとか、蝶を用いて環境評価（蝶相の変化と都市化の関連把握）を試みるなど、単なる生態学にとどまらず遺伝学のおよび生理学的な方向にも研究が進んできている。

こうした先端分野の研究でも引続きアマチュアがリードする形勢に変わりはないようだ。蝶の学問的な研究に関しては日本鱗翅学会が組織されているが、その年次学会で報告を聞いたり学会誌の掲載論文をみたりしても、それらは依然過半数がアマチュアによるものである。ひとつの学会としては、これほどアマチュアのウエイトの高い学会はおそらく他にあるまいと思われる。有名なエコノミストの中にも何人か蝶の愛好家ないし研究者がいるが、おそらく磐瀬太郎氏（元東京銀行調査部長、故人）はその最も優れた例ではないかと思う。同氏は、所有していた標本を戦災で全部消失、その後は標本を一切持たずに研究することによって蝶に関する専門的な論文集を二冊著わしているほか、かつて日本鱗翅学会の会長をも勤めるなど、アマチュアながら大きな影響力を持った科学者でもあつた。経済の分析および研究をなりわいとする自分にとっては、同氏は、全く異

なる世代に属するとはいえないわば同業の先輩であることから親しみを感ずる人物であるが、とりわけ同氏は標本を保有することなくして蝶に関する第一級の研究成果を残されたことに対して強い共感を覚える。

美しい蝶の標本をながめていると、大自然の造形美に驚くほかはなく、また時間の経つのも忘れる。こうした自然の贈物の住み処である森林、草原、丘陵は近年大規模な宅地造成や道路建設のために痛ましく破壊されてきている。そして蝶の採集家の中には、そのことを糾弾することによって、自分の採集する蝶の数などは比較にならぬくらい小さいといつて自己弁護する風潮もみられる。しかし、生命ある蝶を捕えてただ単に標本箱の中の収集種類数の増加に喜びを見いだすことは、自然保護の観点からの問題を別としても、趣味として軽々に許されたりあるいは賞讃されたりするべきことであろうか。また、研究という名の下にはあつても、美しい衣装をつけたこのか弱い生物の命をむやみに奪うことになつてはいないだろうか。こうした問題は当然学会でも常に議論されているところであり、また自分にとつても長らく心の底で消えやらない、もやもやとし

た疑問であつたが、最近になつてようやく自分なりに納得のいく結論に達しつつあるように思う。それは、四季折々山歩きをして蝶をながめること（はやり言葉をもじつていえばバタフライ・ウォッチング）こそが自分にとつては最近の蝶の楽しみ方となつていくことに端的にあらわれている。

週末、機会があれば蝶を見に野山に出かけてゆくが、その意味は、その時々飛んでいる蝶の姿そのものを確認するだけではなく、吸蜜に訪れる花、周囲の木々のありさまや林のにおい、山道の日当りや風の状況、さらには雲のかたちや太陽の明るさなど、まさにその季節全体についても蝶を通して全身に感じることにあるようだ。早春の頃、山道の陽だまりにミヤマセセリやコツバメなどの可憐な蝶がちらちらと花びらが散るかのようにはじめはじめるのを見ると、いよいよ春を迎えたという心の浮き立ちを覚える。そよ風にゆれる草原の野あざみにヒヨウモンチョウが吸蜜する姿がみられはじめると、万物が躍動する盛夏も近い。そして残暑きびしいころの山歩きであっても、木々の梢の上をぴかぴかと銀色の翅を光らせながらウラギンシジミが飛ぶようになれば秋の到来が近いことを思う。冬の好天の日には、山道で越冬中のヒメアカタテハが一時目を覚まして

翅を暖める姿を見ることによって日脚の伸びに思いをはせる。こうした場合、私にとっての蝶は、単に昆虫類鱗翅目に属するひとつの生物ではなく、それが生息する季節とその環境が大きな意味を持っている。

これは、明治から昭和初めにかけて活躍した物理学者であり優れた随筆家でもあった寺田寅彦のあの随筆「えび」のテーマと共通する世界であるといえると思う。中学校の教科書にも出てくるこの有名なエッセーは、田舎から上京してきた六つになる親類の子供に東京と国とどっちがいいかと聞いてみたら、子供は「おくにの方がいい、お国の川にはえびがいるから」と答えたことについて、「えび」の意味を考察したものである。すなわち、寺田の解釈では、この子供がえびと言ったのは必ずしも動物学上のえびの事ではなく、えびのいる清冽な小川の流れ、それに緑の影をひたす森や山、河畔に咲き乱れる草の花、それら全体をひっくるめた田舎の自然を象徴するえびでなければならぬ、というわけである。従って、東京でさかな屋から川えびを買ってきてこの子供にやってみれば、この事は容易に証明されるだろうとしている。

自分にとって最近の蝶の楽しみは、まさにこうした意味で子供時代に親しんだ自然の

思い出の追想とともに、移りゆく四季を体感する喜びが次第に大きな意味を持ってきているように思う。こうした小さな生物が自分にとって大きな喜びを与えてくれることに感謝するとともに、心から自然を愛せるナチュラルリストでありたいと思う。

(日本銀行文芸部「行友」四十九号、昭和六十二年二月)